

## 論文の和文要旨

論文題目	金史良の二言語文学研究—植民地期の朝鮮語／日本語による創作を中心に
氏名	高橋 梓

本論文では、朝鮮人作家・金史良（本名・金時昌、1914-1950?）が多くの日本語作品を発表した1939年から1942年初頭にかけて、朝鮮語による著作（小説・随筆・紀行文等）も残っていたことに注目し、二言語による創作が金史良文学の生成に与えた影響について明らかにすることを目的としている。具体的には、金史良が朝鮮語と日本語でほぼ同じ内容について書いた「二言語著作」（小説・随筆・紀行文等）の異同を明らかにすることをとおして、作家の問題関心の形成過程や、創作における試行錯誤の過程について考察する。

植民地期の朝鮮人作家の日本語作品は、解放後に作家たち自身の「自己批判」を経て長い間タブー視され、その後の研究では「抵抗」「協力」という二項対立的な枠組で作家・作品が評価された。金史良作品については、作品の内容から「抵抗」として評されることが多かったが、近年では朝鮮人作家の日本語作品から「日本文学」「国民文学」とのズレを読み取ろうとする研究が見られるようになり、金史良作品についても単純に「抵抗」と評価するのではなく、金史良の創作における試行錯誤の過程が論じられるようになった。

このように、近年の研究では金史良作品をめぐる読み直しが行われてきた。しかし、金史良が1939年から1942年初頭にかけて日本の雑誌に多くの作品を発表し、代表作とされる作品の多くがこの時期に書かれたものであったため、金史良は「日本語作家」として論じられてきたといえる。しかし、金史良を「日本語作家」とする議論では、金史良が日本語で多くの作品を発表した時期に、朝鮮語でも著作を発表していたことが抜け落ちてしまう。金史良は日本の雑誌に多くの作品を発表していた時期に、朝鮮の雑誌にも著作（長編小説1編、短編小説2編、評論5編、随筆3編、紀行文2編）を発表していた。さらに、それらの朝鮮語著作の中には、ほぼ同じ内容が書かれた日本語著作があるものもある（短編小説2編、随筆3編、紀行文1編）。これらの「二言語著作」の存在は、金史良の日本語による創作が、朝鮮語による創作と切り離せないものだったことを示している。

本論文は、これまでの研究ではあまり論じられてこなかった金史良の二言語著作に注目し、それらの異同を明らかにすることで、近年の研究で論じられてきた金史良の創作における試行錯誤の過程により深く接近しようとするものである。

本論文は以下の5章によって構成されている。第1章では金史良が創作していた当時のメディア状況について考察し、第2・3章では金史良の朝鮮語と日本語でほぼ同じ内容について書かれた金史良の「二言語作品」について論じた。第4・5章では、作家自身の経験にもとづいて書かれた「二言語紀行文」と「二言語随筆」を分析した。

序論では、金史良が日本語作品を多く発表していた時期の朝鮮語著作を整理し、日本語著作と朝鮮語著作の掲載のプロセスの差異や、それぞれの媒体において異なる読者が存在していたことなど、金史良が創作していた当時のメディア状況を提示した。また、金史良作品を含む植民地期の朝鮮文学をめぐる先行研究を、1990年代以前と1990年代以降に分け、それぞれの時期の先行研究の動向を、日本と韓国における金史良の作品集や全集の出版状況と共に整理した。特に、金史良を含む朝鮮人作家の創作言語に注目した「二重言語創作」をめぐる先行研究の議論をふまえながら、本論文の問題関心を提示した。鄭百秀は、朝鮮人作家が朝鮮語と日本語を往来しながら創作するという行為が、朝鮮語（母語）を意識することにつながり、そのことが朝鮮人作家の日本語作品の生成に影響を与えたとした。このような鄭百秀の「二重言語創作」をめぐる一連の研究は、2000年代から近年における「二重言語創作」「二言語創作」の研究に大きな影響を与えたといえるが、本論文では以下の点に注目することで、金史良文学の生成をめぐるより多様な解釈を目指した。第一に、近年の「二重言語創作」をめぐる先行研究の問題関心を継承しながら、ほぼ同じ内容が書かれた金史良の二言語著作に注目した。植民地朝鮮では日本内地からの書籍の移入等に影響を受けながら近代的な読書文化が形成されるとともに、朝鮮語で文学を読む読者層が生み出された。そのため、これまで「日本語作家」として注目されてきた金史良が、同じ時期に朝鮮の読者に向けて朝鮮語著作も書いたことに注目することは、金史良作品がどのような創作の試行錯誤を経て生成されたかについて、より深く論じることができると考えた。第二に、金史良が文芸同人雑誌『文藝首都』に同人として参加したという点である。金史良は『文藝首都』の同人として、「帝国」のメディアで創作する中で、日本人の同人や読者に自身の作品が批評されるという経験をした。そのような経験と共に、『文藝首都』をとおして形成された植民地出身作家同士のネットワークは、金史良の創作に影響を与えていたと考えられる。第三に、金史良が様々な移動の経験をしていた点である。金史良は、本格的に日本の雑誌に多くの作品を発表する前の時期に、日本への「密航」（1931年）や、北京での「漫遊」

(1939年)を経験していた。また、日本で創作していた時期には、朝鮮の山間地帯や日本の朝鮮人移住労働者の集住地の調査も行っていた。これらの移動の経験をとおして、金史良は自身とは異なる立場の朝鮮人の経験に接することになったといえる。

第1章では、金史良が同人として参加した文芸同人雑誌『文藝首都』に注目し、『文藝首都』をとおして植民地出身作家同士のネットワークが形成されたことを明らかにした。保高德蔵が主宰した『文藝首都』は、保高個人の植民地への関心と、新人作家に作品の発表の場を提供するという雑誌の性格から、多くの植民地出身作家(朝鮮人作家・張赫宙、金史良、金達寿、台湾人作家・龍瑛宗)が同人として参加していた。本章では『文藝首都』の巻末に掲載された各地の支部の「読者会」の記録から、同人と読者の植民地出身作家の作品をめぐる評価を読み取った。その上で、金史良が龍瑛宗と金達寿に宛てた書簡に注目し、日本人の同人・読者とは異なる問題関心が植民地出身作家の間で共有されていたことを提示した。さらに、金史良と金達寿の手紙のやり取りからは、二人の間で共有された問題関心が、それぞれの作品の生成に影響していたことを明らかにすることができた。

第2章では、朝鮮語作品「留置場에서만남사나이〔留置場で会った男〕」(『文章』1941年2月)と、日本語作品「Q伯爵」(金史良第二作品集『故郷』甲鳥書林、1942年4月)を、ほぼ同じ内容が書かれた「二言語作品」として注目し、二作品の表現の差異を明らかにしながら、それぞれの作品を分析した。これらの二作品には、日中戦争が勃発し、アジア・太平洋戦争へと展開していく中で、帝国日本の「挙国一致」の体制や「更生」を意識していく朝鮮知識人(「われわれ」)が描かれるとともに、このような朝鮮知識人の「国民」化からは逸脱した存在である「王伯爵」／「Q伯爵」という人物が登場した。朝鮮語作品に一貫して見られた「われわれ」の「伯爵」への共感、朝鮮知識人が帝国日本の「国民」として自らを意識する際の揺れや迷いとして解釈することができた。一方で、日本語作品では、「われわれ」の「伯爵」への共感が作品をとおして徐々に弱まっていった。このことは、金史良が「帝国」のメディアにおいて日本語で朝鮮知識人に関する作品を発表する際に、帝国日本の国策を意識しながら表現を選び直さざるをえなかったものとして解釈できるといえる。

第3章では、朝鮮語作品「지기미〔チギミ〕」(『三千里』1941年4月)と日本語作品「蟲」(『新潮』1941年7月)を、ほぼ同じ内容が書かれた「二言語作品」として注目し、二作品の異同を明らかにしながら、それぞれの作品を分析した。これらの二作品には、船の積み荷の荷下ろしをする沖仲仕として働く朝鮮人移住労働者の集住地が形成された東京・芝浦海岸を舞台に、集住地を訪れる語り手と、集住地に住み着きながら労働

者たちから「チギミ」と呼ばれている老人との交流が描かれた。これらの「二言語作品」の異同に注目すると、集住地の描かれ方をめぐる差異が明らかになった。まず、朝鮮語作品「チギミ」では、集住地を訪れることによる語り手の「孤独」の変化についてははっきりと描かれず、また集住地の空間的な特徴をめぐる描写が目立っていた。一方で、日本語作品「蟲」では、集住地における語り手の「孤独」の変化や、集住地で過ごす労働者の様々な表情の描写が見られるなど、日本「内地」とは異なる「別世界」としての集住地の特徴がより具体的に示された。特に、「メツカ」「メヂナ」などの用語が暗号のように用いられながら集住地が描かれたことは、「内地」の「別世界」としての朝鮮人移住労働者の集住地の特徴がより強調されたものとして解釈できる。二作品の集住地をめぐる描写の差異は、金史良が日本において朝鮮固有の文化を共有する朝鮮人移住労働者の集住地という題材に新たな可能性を見出していった過程で生じたものであるといえる。

第4章では、朝鮮の山間地帯での調査・取材の経験をもとに書かれた朝鮮語紀行文「山家三時間」(『三千里』1940年10月)と日本語紀行文「火田地帯を行く(一)～(三)」(『文藝首都』1941年3-5月)の表現の差異を明らかにし、これらの「二言語紀行文」をそれぞれ分析した。これらの紀行文では、作家自身と考えられる語り手が、同行者・金承久と共に江原道の山間地帯の人びとの生活を調査するために火田民が住む洪川まで向かっている途中で、悪天候のために足止めになり、山民の家で過ごした際の出来事について書かれている。朝鮮語紀行文では、山民の家で食料を要求するバスの乗務員・乗客の山民への態度に対する「私たち」(語り手「私」と同行者の金承久)の怒りが見られたが、途中で語り手が「私」に変化すると、次第に山民が間接的に「掠奪」されているという問題へと意識が向けられていった。一方で、日本語紀行文では、同行者の金承久の名前が明かされないことで、紀行文をとおして「僕」という語りに揺れは見られず、またバスの乗務員・乗客への「僕」と同行者の怒りは見られないという点で特徴的であった。さらに、バスの引き上げ作業に動員された山民が、彼らの生活に必要な「薪の城」が洪水で流されそうになることを気にかけて発せられた叫び声が、バスの乗務員によってかき消されるという描写や、人が立ち入ることができないような場所で暮らしていた火田民出身の酌婦のエピソードからは、植民地支配を経て朝鮮の山間地帯に形成された階層を浮き彫りにするとともに、そのような階層が山民の生活に与える影響を読み取ることができた。

第5章では、「渡航証明書」を持たない金史良が1931年に日本に「密航」を試みた経験について書かれた二言語随筆(朝鮮語随筆「密航」『文章』1939年10月、日本語随筆

「玄海灘密航」『文藝首都』1940年8月)と、1939年の3月末から4月上旬にかけて北京を「漫遊」した経験について書かれた二言語随筆(朝鮮語随筆「北京往来」『博文』1939年8月、日本語随筆「エナメル靴の捕虜」『文藝首都』1939年9月)をそれぞれ分析し、金史良がこれらの移動の経験をどのようにとらえていったかという、作家の問題関心が形成される過程について考察した。北京での「漫遊」の経験について書かれた二言語随筆では、北京において自身を中国人の「ゲリラ戦」の「敗残兵」／「捕虜」としてとらえていくという認識は共通して見られた。しかし、北京に住む朝鮮人移住者が中国人を日本語で一喝したというエピソードが日本語随筆に挿入されたことは、「国威」や「優越感」によって中国人に「傍若無人」な態度を取ってしまう朝鮮人の態度を問いただすものであったといえる。また、日本への「密航」を試みた経験について書かれた二言語の随筆からは、金史良が「密航」の経験をしたことで、日本において朝鮮人移住者が取り締まるべきものとされたことに敏感に反応するようになったことを読み取ることができた。しかし、日本語随筆に加筆された部分では、朝鮮人の密航が命がけの渡日であることが強調されるとともに、結末部分において金史良が朝鮮人移住者の「白い着物」から積極的に美しさを見出そうとする様子を垣間見ることができた。このような日本語随筆の加筆部分からは、日本において取り締まるべき存在とされる朝鮮人移住者から積極的に美しさを見出そうとする、金史良の朝鮮人移住者への問題関心として解釈できる。

結論では、本論で論じてきた二言語著作を時系列で整理し、本論の議論をまとめた。本論文で明らかにした二言語著作を時系列で整理すると、金史良が日本の雑誌に作品を発表していた時期をとおして自身とは異なる立場の朝鮮人への関心を持つようになり、さらに1940年から1941年にかけては朝鮮人の間の階層の差異や、「国民」化から逸脱した存在へと関心が示されるようになったことが明らかになった。

本論文の意義は、金史良の二言語著作に注目することで、日本語作品のみを論じた場合には見えてこなかった金史良の創作の試行錯誤の過程や、問題関心の形成過程を明らかにした点である。金史良の問題関心の形成過程をふまえることは、金史良の代表作とされている小説「光の中に」(『文藝首都』1939年10月)や、「民族主義作家」からの「後退」と評されてきた1941年前後に発表された金史良作品を新たに読み直すことを可能にすると考えられる。